

インドの仏教遺跡に関する研究(その1) アジャンタ石窟群

高橋 敏郎

A Study on the Ruins of Buddhism in India (Part 1)
Ajanta Caves

Toshiro Takahashi

1. はじめに

インド、マハラシュトラ州アウランガーバード(Aurangabad)の郊外、北方104Kmのデカン高原の大地の西北サフヤドリ(Sahyadri)連丘をえぐり蛇行するタブティ川支流のワゴラ川が馬蹄形に湾曲した渓谷の高さ70mの岸壁にアジャンタ石窟群はある(図-1)。長さ1.5Kmにわたり岩盤に掘りぬかれたこの寺院群は、サーンチー(Sanchi)、ポドガヤー(旧名ブッダガヤー(Bodhgaya))と並ぶインドにおける仏教美術の重要遺跡である。

インドにその発祥をもち開花し、東アジアから日本にまで伝播した仏教は独自の仏教美術と仏教建築を創りあげてきた。しかし、現在世界で仏教国といわれるのは日本とタイのみである。発生から開花、滅亡へと歴史をつづってきたインドの古代仏教寺院群を調査し、仏教建築の変遷をたどり歴史の中で位置づけ、仏教建築の源流を探るのが本研究の目的である。本稿ではその一端としてアジャンタ石窟群につき報告する。

調査は2002年3月28日から3月29日にかけて行った。



図 - 1 対岸の丘の上から見た石窟寺院群の全景

2. 石窟寺院群の建築

石窟寺院(窟院)は現在インド全土に約1200現存している。古代にはおそらく無数に存在していたであろう仏教寺院やストゥーパは今では大多数が失われてしまったが、石窟寺院はその材質ゆえに、また、構造がゆえに残されてきた。現存する石窟の内750は仏教窟である。

アジャンタ石窟群は、1819年にデカン高原で演習を行っていたマドラス駐屯イギリス騎兵隊の仕官が非番の日に虎狩りに来て、高台から虎の逃げ込むのを見て密林に隠された廃墟を発見したのである。第10窟の柱には発見したジョン・スミスのサインと1819.4.28の日付が今も残されている。

長さ1.5Kmに及ぶ花崗岩の岩盤の中腹に穿たれた大小の石窟は30におよぶ。開窟年代は個々に研究者により差があるものの、紀元前2世紀から紀元後1世紀の前期石窟と紀元5世紀から7世紀にかけて造られた後期石窟に分けられる。仏教の石窟は機能、構造がともに異なるチャイティヤ(chaitya)窟(塔院)とヴィーハラ(vihara)窟(僧院)とがある。チャイティヤ窟は「仏塔」あるいは「聖壇」を意味し、礼拝の場所としての石窟である。ヴィーハラ窟は起居するための僧院としての石窟である。

2-1. 前期石窟

前期石窟は湾曲部に沿いほぼ横一列に並び(図-2)、向かって右手から順に番号が付いた石窟群のほぼ中央部の第8, 9, 10, 12, 13, 15窟でチャイティヤ窟は第9, 10窟である。他の4窟はヴィーハラ窟である。小乗仏教時代のこれらの石窟は構造、機能に重きが置かれている。

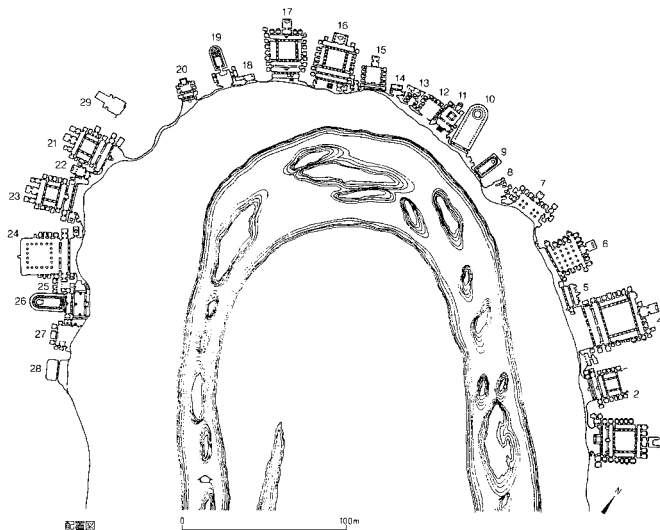


図-2 アジャンタ石窟全図(数字は石窟番号)

第10窟は刻銘により紀元前2世紀に建立されたことが知られ、礼拝堂としてアジャンタで最も古く大規模なものである。チャイティヤ窟の形式はすでに確立されている。まだ仏像が作られていない時期のため、礼拝対象として半球形のストゥーパが祀られている(図-3)。吹き抜けになった身廊を側廊が取り巻き、間を柱脚、柱頭に装飾のない三十九本の八角形の列柱が隔てている。身廊の天井はヴォールト状に岩盤を削り貫いたものだが、木造の垂木を取り付け格天井となっていた痕跡をはっきりと見ることが出来る。現在、木製垂木は失われている。側廊の垂木は岩盤から削りだされたもので上部はやはり格天井である。石造の洞窟に垂木は必要ないのだが、ヴォールト状チャイティヤ窟に見られる不可思議な造形である。ファサードは木造の大型チャイティヤ窓であったが、現在原型は失われ仮の仕切りが設けられている(図-4)。



図 - 3 第10窟内部



図 - 4 第10窟ファサード

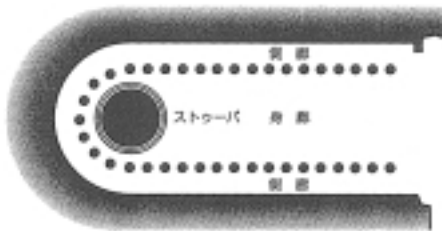


図 - 5 第10窟平面



図 - 6 第9窟ファサード

第9窟の規模は第10窟の約半分で小さなチャイティヤ窟である。建立は紀元前1世紀である。ファサードは正面にリブの付いた大きなチャイティヤ窓と五つの小さな浮き彫りのチャイティヤ窓を彫り残したように出来ている(図-6)が、現在ではファサードは後から付加えられた

ものと考えられている。内部は二十三本の柱で身廊と側廊に隔てられている。アプスの中心には円形基壇の上にストゥーパが安置されている。

第12窟は最も広い前期ヴィーハラ窟で僧院の構造をよく示している。前面は崩壊したのか今は失われ剥き出しとなっている。内部に壁画などは無いが、約11m四方の方形の広間に面した3側壁にそれぞれ4房室が設けられ、石窟僧院の基本構造を表している宿舎に使用されていたことがわかる。



図 - 7 第12窟内部装飾

房室の入り口はそっけなく長方形に切り取られた穴であるが、入口上部にチャイティヤ・アーチの浮き彫りが施され(図 - 7)、禁欲的な機能一辺倒の僧院に彩を与えている。

第13窟は小規模でやはり前面は失われている。小さな方形広間の3側壁に合計7房室を設けている。房室には各二の石造りのベッドと石製の枕が付属している。第15窟はやや規模が大きく方形広間の両側壁に8つの房室をもち、奥壁の中央には祠堂が設けられていて前期僧院で唯一の形式である。壁画も描かれていてわずかに見ることができる。

2 - 2 . 後期石窟

前期窟の建立から約400年の期間をおいて前期窟の両側に後期窟の開窟が始められた。後期ヴィーハラ窟を特徴づけるのは大乘仏教時代を反映して、仏像、装飾彫刻、彩色壁画などである。代表的なものは第1, 2, 16, 17窟である。いずれも彩色壁画に彩られていて、アジャンタを有名にしたものである。いずれも正面に柱廊があり、内部は方形広間があり列柱が巡らされている。奥壁中央には仏像が安置された祠堂が設けられ、16窟を除き前室が付属している。両側壁面には房室が並び僧坊となっている。修行と礼拝が同室で行うことが出来る大乘仏教時代の特徴を示している。

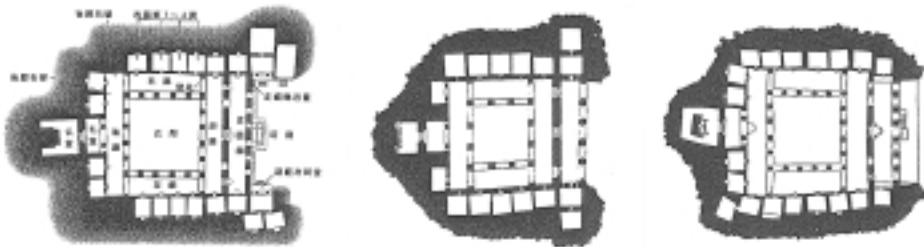


図 - 8 左から 第1窟、第2窟、第17窟(第16窟は図 - 2を参照)

第1窟は正面廊（ベランダ）、方形広間（ホール）、房室、祠堂を備えた大規模な僧院である。入口前には柱廊（ポーチ）がある。正面柱廊の柱は、基盤は八角形、柱頭は方形と丸型があり、柱身には精巧な模様が彫り分けられている。開窟は6世紀初頭と推測されている。

第2窟は第1窟に比較しやや小規模の僧院である。おそらく第1窟に続く開窟で、6世紀前半であろうと考えられている。内部回廊の柱は第1窟が20本に対し12本である。内部ホールは第1窟と同様に柱が直接天井を支える形式をとっている。

第16窟は大規模窟で内部回廊の柱の数は20本である。祠堂に前室は無い。重要なのはベランダ左壁の刻銘で、この解読により5世紀末に建立されたことが判っている。

第17窟も大規模窟で内部回廊の柱の数も20本、房室の数が16と最大である。第16窟同様刻銘の解読により建立年代を知る手がかりとなった。

第7窟は他の窟とは形態が異なる特異なヴィーハラ窟である。正面に八角形の四本柱に支えられたポーチがベランダから2箇所突き出していてホール（方形広間）が無く、正面には祠堂があり、前室との周壁には仏像が刻まれている。僧房（房室）は数も少なく正面横一列と前庭側面に並んでいる。

後期チャイティヤ窟は第19、26、29窟の3窟で、29窟は未完成窟である。

第19窟は小規模で、開窟は5世紀末とみられる。ファサード中央にポーチが付き、上部に大きなチャイティヤ窓が設けられ、両脇をヤクシャー（夜叉神）が守っている。正面前庭両脇には二つの窟が設けられ小礼拝堂となり、向かって右壁面には多くの仏像が彫刻されている。

前期チャイティヤ窟では内部のヴォールトの形がそのままチャイティヤ窓の大きさとして表れていたが、後期チャイティヤ窟では内部空間の形態とは別にファサードの形式が整えられている（図-11）。大きさは第9窟とほぼ同じ大きさであるが、建築様式は成熟し、アジャンタ最も完成度の高い石窟寺院であるといえる。内部は2種類の柱で精巧に装飾されたフリーズを支え、ヴォールト天井と石造の垂木へとつながっている。アプス（半円形の出っ張り部分、聖



図 - 9 第16窟遠景



図 - 10 第7窟正面

壇が設えられる)の床は身廊の床より一段高くなり中央にやや卵型をした覆鉢のストゥーパが安置されているが、佛龕が設けられ仏像とストゥーパが一体化している。アプスの両脇にある柱の前には立像があったのであろう脚部が残っている(図-12)。



図-11 第19窟ファサード



図-12 第19窟内部

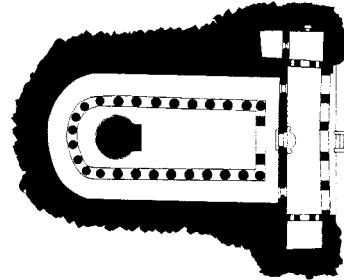


図-13 第26窟平面

第26窟は第19窟よりも大きいチャイティヤ窟で、5世紀末からの開窟である。正面には列柱が立ちペランダの奥に三つの入口がある。現在は列柱の柱脚部分のみが残り、上部ポーチ底部分も崩壊して残存しせず、破断面から推測するしかない(図-14)。正面入口上部のチャイティヤ窓周囲の外壁には三尊佛や菩薩像、男女像などの多数の像が数段に重なる小窓の中にずらりと居並ぶ。ファサードの構成は第19窟と同様であるが、相互の関係に乏しく、バランスを欠いていて爛熟期にさしかかり、いささかやりすぎのきらいがある。

内部は装飾的な浮き彫りを施した28本の柱により身廊と側廊が分節され、ぎっしりと彫刻の居並ぶ丈の高いフリーズがヴォールト天井を支えている。ヴォールトには岩盤から削りだされた木造風輪垂木(まるで竜骨のようである)が配置されている。アプスにはハルミカー(平頭)



図-14 第26窟ファサード



図-15 第26窟内部

から上が失われたストゥーパが低い基壇の上に安置されている。第19窟で初めて仏像とストゥーパが一体化したが、ここではさらに一体化が顕著になり、仏陀の両横には二体の脇侍がいる。

3 . 石窟寺院群の装飾美術

アジャンタを有名にしたのはその多数の石窟群とともに、後期石窟群にある彩色壁画と彫刻、仏像である。彩色壁画で代表的なものは第1窟と第2窟である。もともとインド人は彫刻の才には恵まれ、多くの傑作をのこしているが、絵画やカリグラフィー（習字）の分野ではさしたるものは残されていず、後にペルシャ人の影響をうけるまで傑作といえるものはほとんどないのである。しかし、アジャンタにおける壁画はインド美術の最高傑作である。壁画が残る代表的なものは第1、2、16、17窟である。この他にも壁画の名残を見かけることの出来るものが数窟ある。壁画のテーマは仏伝図（仏陀のこの世での伝記絵図）、ジャータカ（本生図＝仏陀の前世を物語る絵図）、仏教説話図が主となっている。

第1窟は奥壁礼堂（前室）の両脇に描かれた二菩薩が特に注目される。向かって左手には蓮華手菩薩（れんげしゅぼさつ）が描かれている。白い姿態の菩薩が右手指先で蓮華の花の茎を手にし、首、胴、腿の身体を三つに曲げたトリバンガ（三屈法）と呼ばれる描写法により優美な動きを表し、気品のある画である（図 - 16、17）。



図 - 16 第1窟蓮華手菩薩壁画



図 - 17 同金剛手菩薩壁画

アジャンタの石窟壁画が日本に紹介された大正時代以来、この菩薩像は法隆寺金堂の壁画(勢至菩薩像)との類似性がいわれている。宝冠をつけた菩薩の姿は飛鳥時代の日本仏教美術に影響を与えたとする説は有力である。だが、筆者の最初に思い起こしたのは薬師寺の薬師三尊の脇時である。法隆寺の壁画は、この菩薩と同様に華麗な宝冠をつけた姿ではあるが、そこにはトリバンガは見られない。薬師三尊の脇時は宝冠こそ簡略化されているものの、下半身にまとう衣、首にかけられた腰までとどく装飾品、首飾りなどにも共通性があるが、なによりも日本の仏像には数少ないトリバンガによる身体の表現である(図-18)。

向かって右手には金剛手菩薩(こんごうしゅぼさつ)が描かれている。こちらは肌の色が褐色で、表情も異人種を思わせるが、これも仏教が多数の人種に人種を超えて信奉されていることを表していると考えられる、と共に、左の菩薩の白い肌と右の菩薩の褐色の肌を対称させる描画的な工夫と考えられる。金剛手菩薩は右手に金剛石の粒を持ち、金剛石からは金色の花弁の如き輝きを発している。やはりトリバンガにより体をくねらせ仏堂の本尊のほうに体を向けている。金剛手菩薩は宝冠と真珠の首飾り、紐状の腕輪以外装飾品を身につけていない蓮華手菩薩に対し、金細工の宝飾品を煌びやかに身につけているのも特徴で、褐色の肌に映える金の輝きを意識した描画であると同時に、人種による装いの違いをも表しているといえる。



図-18 薬師寺日光・月光菩薩像

これらの壁画は岩盤をくりぬいた石壁の上に漆喰を塗り、その上に宝石や貴石、黄土、金などの岩絵の具で描かれたものである。永い年月の間の漏水などにより漆喰が剥げ落ち壁画が失われている。側壁のジャータカや天井壁画はかなり失われた部分がある。

第2窟は外部の天井にも、ポーチにも絵や浮き彫りが残っている。保存度からいって第1窟以上であろう。内部のホール側壁は仏伝図を中心に描かれ曼荼羅図と思われるものもある。八角柱の柱頭には浮き彫りの付いた肘木が取り付けられ、天井は花や鳥、人物、幾何学的模様などの浮き彫りや絵画でぎっしりと埋め尽くされている。第16、17窟も仏伝図やジャータカ、王侯の生活などの壁画で埋め尽くされている。第7窟、第15窟などにもわずかだが装飾壁画の残されたものがある。



図-19 第2窟祠堂前天井

チャイティア窟でも第19窟、第26窟のヴォール

ト天井には動物、鳥、人物などの壁画が描かれている。

4. おわりに

チャイティヤ窟の石造の垂木は木造寺院を模したものであろうことは定説である。現在は失われて存在しないが、かつて古代仏教の時代インドには多数の木造寺院が建っていたであろうことは間違いあるまい。チャイティヤ窟はキリスト教会との類似性をいわれ、また、壁画は日本の東大寺の壁画の原形といわれるが、単純な形態的な類似性のみで安易に判断はできないであろう。インドの乾燥した大地を歩いてみると、無用の岩塊、不毛の岩山、立ちのぼる断崖という風景にたびたび出会う。世の中に価値の無い物の中に無限の世界を塗りこめようとしていたのではないのかと感じる。

遠く離れたインド、ここに発祥した仏教の建築源流をたどる今回の調査はあわただしく行われたのだが、実りあるものであった。ご指導をいただいた師小寺武久先生にこの場を借りて謝意を表します。

図版出展

- 図 - 1、3、4、7、9、10、11、12、14、15、16、17、19 筆者撮影
- 図 - 2：神谷武夫「インド建築案内」TOTO出版、1996.9、P362
- 図 - 5：立川武蔵「アジャンタとエローラ」集英社、2000.6、P22
- 図 - 6：小寺武久「古代インド建築史紀行」彰国社、1997.11、P51
- 図 - 7第1窟：立川武蔵「アジャンタとエローラ」集英社、2000.6、P12
- 図 - 8第2窟：神谷武夫「インド建築案内」TOTO出版、1996.9、P364
- 図 - 8第17窟：小寺武久「古代インド建築史紀行」彰国社、1997.11、P55
- 図 - 13：神谷武夫「インド建築案内」TOTO出版、1996.9、P368
- 図 - 18：法相宗大本山薬師寺「薬師寺」

参考文献

- 小寺武久「古代インド建築史紀行」彰国社、1997.11
- 立川武蔵「アジャンタとエローラ」集英社、2000.6
- 神谷武夫「インド建築案内」TOTO出版、1996.9
- 佐藤正彦「南インドの建築入門」彰国社、1996.12

〒483 - 8086 愛知県江南市
高屋町大松原172番地
愛知江南短期大学
生活科学科